最後に、言っておきたいこと。

yu☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後に、言っておきたいこと。

【Ｎコード】

Ｎ７９８９Ａ

【作者名】

ｙｕ☆

【あらすじ】

ある日、コナンと哀は転校することをみんなに告げる。すると、歩美の提案でお別れ会が開かれることになった。転校当日、お別れ会を楽しんでいるコナンと哀に、クラスのみんなは質問タイムをすることにした。すると、光彦からとんでもない質問をされる。問いつめられ、しかたなく答えるコナンだが、それを蘭が聞いてしまい…。

FILE1　コナン、哀、転校！？

朝。１－Ｂの教室では、みんなガヤガヤ騒いでいる。そこに先生が入ってきた。
「みなさん！おはようございます！」
「おはようございま―す！」
先生は、
「まず、江戸川君と灰原さんから話しがあるから聞いてね。」
コナンと哀は前に行き、残念そうな顔をして話す。
「実は、俺と灰原、今週いっぱいで転校することになっちまったんだ。」
『えぇ～～～！！』
みんなが驚く。それも当然だ。ここに転校して一年もたっていないのだから…。
「本当は行きたくないんだ。ここにいるみんなは家族と同じぐらいで一番大切だから。」
嘘だ。そう思った。確かに、ここにいるみんなも大切なのかもしれない。でも俺には、家族以上に大切な、蘭がいる。早く蘭の元へ本当の姿で帰りたい。その願いの方が大きかった。実はこの前、組織を倒すことに成功したコナンと哀は、晴れて元の姿に戻り、帝丹高校に戻る（転校する）のだ。「コナン君、哀ちゃん、本当に転校しちゃうの！？」
歩美が、悲しそうに言う。
「あぁ…。」
「でもよーコナン。少年探偵団はどーすんだ？」
コナンはしばらく黙りこんだ。
「お前ら、この短期間でかなり推理力上がったから、三人でやっていける。俺と灰原がいなくてもな。」
すると、元太は納得したようで、

「そっか。そうだよな、光彦。」
と言った。
「えぇ。コナン君の場合、いっつも抜け駆けしますから、丁度いいかもしれません。」
（それはよけいだっつーの…。）すると、歩美がふと思い出したように言った。
「そうだ！先生、コナン君と哀ちゃんのお別れ会やりたい！」
「あ、それはいい考えね。じゃあ、江戸川君と灰原さんが転校することになる金曜日にやりましょう。」
『やろーやろー！』コナンと哀は嬉しそうに、
「みんなありがとな。」
「ありがとう。」
と笑った。こうして、お別れ会が開かれることになった。

ＦＩＬＥ１　コナン、哀、転校！？（後書き）

自分的に、前の小説よりは上達してると思います。

FILE2　お別れ会

“いざとなるとさみしい”お別れ会の日になって、改めてクラス全員が思ったこと。ただ、光彦だけは違った。何か決意をかためたように、立っていた。
「じゃあみんな！今から、江戸川君と灰原さんのお別れ会を始めます！」
パチパチパチ…。先生は、さっそくプログラムを進めていく。
「まず始めに、みんなでいすとりゲームをしたいと思います。音楽が止まったら、みんなイスに座ってね。」ありがちなゲームだな、とコナンは思った。
「じゃあ始めます！」
“チャラーチャーチャラチャー”
「わ～！」
音楽が止まった所で、みんながイスに座る。何回も何回も繰り返して、最後に残った2人は…。
「はい、みんな！最後の対決だよ！じゃあ江戸川君と円谷君、始めるよ！」
“チャラーチャーチャラッチャーッチャー”
「ボスッ」
2人の中で1人だけ、あっという間に座ってしまった。
「江戸川君の優勝～～！」光彦は、おしかったです！と言うように、「やっぱりコナン君には勝てません。」
とみんなに言った。
「じゃあ給食の時間だよ！みんな手を洗ってきてね！」
『は～い！！』みんなが手を洗いにいく。給食の準備が出来たところで、先生がお決まりの言葉を言う。
「じゃあみんな！いただきます！」
『いただきま～す！』みんなモグモグと食べ始める。すると、歩美

ちゃんが、
「コナン君、私ね、コナン君に言いたいことがあるの。」
と真剣な表情をして言った。
「私、コナン君のことが好き！」
『えぇ〜〜！！』

FILE3　歩美の告白

「私、コナン君のことが好き！」
『えぇ～～！！』突然の告白にクラス中が驚いた。そして、
「そ…それ、まじかよ…。」
元太はもはや白骨状態になっていた。
「あ、歩美ちゃん…。」
コナンは、歩美が自分のことを好きなのを知っていたが、やはりとまどっていた。
「俺な…」
「え…遠距離恋愛でもいいの！」
（…お前…本当に小1か？）コナンは、一瞬、オイオイ、と思った。
「でも…私諦めるから…」
「え？」コナンは不思議だった。
「コナン君には、好きな人がいるって知ってるから…」
「す、好きな人って…」
コナンは焦った。（ら、蘭のことか？それとも…勘違いしてるのか？）
「うん、すっきりしたぁ！」
「…はぁ？」
な、何がすっきりしたんだ？と、コナンはワケわかんねぇといった表情だ。
「何がすっきりしたの？」
「え？コナン君に、ちゃんと自分の気持ちが言えて。」
「あ、そう…。」
コナンは、やっと何がすっきりしたのか理解できた様子だ。
「あのー…。話は終わりましたか？」
先生が間に入るように言った。
「え、あ、はい。」

「あ、あのね、あと1時間、時間があいてるんだけど何かしたいことある？」
「はーい！」
1人の生徒が手をあげた。
「私、最後だからコナン君と哀ちゃんに質問とかいっぱいしたい！」
「じゃあ、それでいい？」
『いいでーす！』
「じゃあ質問タイムを始めまーす！」というわけで、質問タイムが始まった。

FILE3　歩美の告白（後書き）

歩美が、コナンの好きな人を誰だと思っているかは、しばらく続きを読んでいれば分かりますよ！　B

y　作者yu☆

ＦＩＬＥ４　光彦の疑問

「それじゃあ質問タイムを始めま～す！誰か質問ある人！」
「はい！江戸川君と灰原さんは、どこに行くんですか？」
「え？ア、アメリカだよ！」
「私はイギリス…。」
もちろん、アメリカやイギリスに行くと言うのは嘘である。２人とも元の姿に戻り、帝丹高校に戻る（哀は転校する）のだから。
「え～！コナン君と哀ちゃんそんなに遠くに行っちゃうの～！」
歩美はとても残念そうだが…。
「じゃあ他に質問ない？」みんな質問を考えている。
「はいっ！えぇ～っと、コナン君の好きな人って誰ですか？」
この質問は、もちろんコナンにひそかに思いをよせている子の質問だ。
「えっ！えぇ～っと…。その…」
コナンは焦る。少なくとも、本当のことを言う気はないのだが…。
「あ、哀ちゃんでしょっ！」
「えっ？」
「コナン君は、哀ちゃんのことが好きなんでしょ！？」
『えぇ～っ！！』先程の歩美の告白と同様、クラス中が驚いている。
一番驚いているのはコナンと哀だが。
「そうなん…でしょ？」
どうやら、歩美は勘違いしているらしい。
「そ、そんなわけないじゃない！僕は灰原のことなんて、ちっとも…。」
（俺は、小さい頃からずっと蘭が好きだからな…。）
「え？そうなの？私、哀ちゃんとコナン君は仲いいからてっきりそうだと…」
この言葉からすると、歩美の勘違いはとけたらしい。

コナンはほっとした。（…やっぱりあなたは蘭さんのことが好きなのね…。吉田さんの勘違いに少し期待した私がバカだったわ…）話を聞いていた哀は、わかっていたものの、やはり少し残念そうな顔をしてコナンの横顔を見ていた。そんな哀の様子を見ていた歩美は感づいた。哀も、コナンのことが好きなんだ、と…。（両方、実らない恋をしたね、哀ちゃん…。）歩美は心の中でそうつぶやいた。

そこに、

「あのー、コナン君に質問…というか疑問があるんですけどいいですか？」

と、光彦がいつもとはまったく違う表情で言った。これには、みんなも困惑した。そして、光彦は一言、こう言った。

「あなたは、あの高校生探偵の工藤新一さんなんですか？」

FILE5　光彦の推理

「あなたは、あの高校生探偵の工藤新一さんなんですか？」
「えっ？」
コナンは驚いた。哀もびっくりしている。
「ぼ、僕が、新一兄ちゃん…？」
「そうです。」
「…ハハハッ！わ、笑わせないでよ！僕が新一兄ちゃんなわけないじゃない！」
と言いつつも、コナンは明らかに動揺していた。光彦は、けっこう鋭いからだ。
「光彦君、それってどういうこと？」
歩美が半信半疑で聞いてきた。
「そう聞かれると思いました。」（思いましたってことは…おいおい！）先生はあたふたして、急に止めに入る。
「ねぇ円谷君。変な質問はやめましょ？」
「いいえ、変じゃありません。ちゃんと証拠はあるんです。」
光彦は真剣だ。
「じゃあ証拠見せてよ！」
とコナンは言ったものの、言い逃れ出来なくなったらどうしようかと思っていた。
「まずは1つ目です。クラスの女の子に聞いたんですが、コナン君は転校してきたときに、サッカーは小学校のころからやっていたと言ったそうですね。それが1つ目です。」
「……。」
「2つ目は、コナン君は前、“俺の体を小さくした黒づくめの…”と言っていました。これは、コナン君の体が縮んだということです。」
「……っ！」

そして光彦は、コナンが言い逃れ出来ないようなことを言った。
「そして徹底的な証拠は、コナン君が新一さんの声で蘭お姉さんに電話していることです。」
「えっ！？」「僕、コナン君が公衆電話で電話している所を見たんです。」
コナンは大きく目を見開き、しばらく黙りこんだ。
「…あぁ、そうだ。」
この答えに、光彦と哀以外のクラス全員が口をぽかんと開け固まっていた。そして哀は、この話題に触れたくないと思い、席に戻ろうとする。すると、
「灰原さん！」
と光彦に呼び止められた。
「え？」
「灰原さん。あなたも、本当は小学生じゃないんでしょう？」哀は言うか言わないか少し悩んだ。
「……えぇ。」
そしてコナンと哀は、小学生に難しくないように、哀が組織の一員でその薬を作ったということ以外を話した。先生は、
「そんな事が…。でも小１の授業、退屈じゃなかった？」
と、最後の方は少し笑いながら言った。
「そりゃ、もう退屈ですよ。」
コナンは苦笑いした。その時…。
「ガタッ」
廊下で大きな音がした。
「何だ！？」
コナンと先生は、ドアを開けた。「ら、蘭！？」
蘭は、コナンのことをずっと見つめていた。
「まさか…今の話…」
「えぇ、聞いてたわよ…。いつも私たちのこと騙してたのね…新一…。」

FILE6　蘭の怒り

「いつも騙してたのね…新一…。」
「蘭……。」
蘭は、今にも泣きそうな顔をしている。
「酷い！酷いよ新一！私は新一のことずっと心配してたのに！それなのに…」
「だ、誰も心配してほしいなんて言ってないだろ！」
「……っ！」
“ダッ”蘭は、コナンの忘れ物を届けに来てたらしく、忘れ物をおもいっきりコナンの頭にぶつけ、走って行ってしまった。
「しまった！お、おい、蘭！？……くそっ！」コナンがしまったと思った時にはもう遅く、蘭は視界から完全にいなくなっていた。
「最悪だな、俺…。」
そう、自分は最悪だ。好きな女を泣かせて、思ってもいない事を言って傷付けて。本当に、最悪だ。
「工藤君、あなた今、自分は最悪だとか思ってるんでしょ？」
「えっ？」
灰原に、自分の心の中を見透かされてるようだった。
「自分のこと責めてるのもいいけど、早く蘭さんの所に行ってあげたら？」そうだ。自分のことを責めてる場合じゃない。
「ありがとな灰原！じゃあな、みんな！元の姿に戻ったら、また遊びに来るから。今日は本当にありがとう。」
『コナン君…。じゃあね！』コナンはその言葉を聞くと、蘭を探しに駆け出していった。

「蘭、どこにいるんだ？」
どこを探しても蘭は見つからなかった。高校にも、蘭の家にも、俺んちにもいなかった。しばらく走っていると、ふと見た公園のベン

チに誰かが座っていた。誰なのか分からなかったので、おそるおそる近付いていく。すると、
「蘭！？」
そこには、目を真っ赤にした蘭がいた。
「新…一…」
コナンはとっさに謝る。
「蘭…ごめん！いつも心配してくれてたのに…。」
すると蘭はコナンのことを睨んだ。
「なによ、心配しなくていいんじゃないの？」
「あれは…」「今までずっと傍にいたんでしょ！！じゃあ私がどれだけ新一のこと心配してたか分かってるんじゃない！それなのにどうして！どうしてなの新一！」
蘭はそれだけ言うとコナンを突き飛ばし、またどこかに走っていってしまった。
「……はぁー…」
コナンは、溜め息をついた。そんな光景を、ある2人が見ていると も知らずに…。

ＦＩＬＥ６　蘭の怒り（後書き）

さあ、この二人は誰でしょう。（笑）あ、怪しい人じゃないですよ！

ぜひ推理してみて下さい。

ＦＩＬＥ７　大阪からの訪問者（前書き）

そう、あもう題名であの２人が誰だか分かりましたよね？の２人です。

FILE7　大阪からの訪問者

「……はぁ…」
コナンは溜め息をついた。そんな光景を、ある2人が見ていた。
「なぁ平次、どういうことなん？さっぱり今の蘭ちゃん達の話の意味分からへんのやけど。」
「…やかましいわ、ちょう黙っとき。」
平次は、複雑な表情をして、ポツン、と立っているコナンに目を向けた。
（バレてしもたんやな、姉ちゃんに…。）そう、ある2人とは平次と和葉のことだったのだ。もちろん、今までのコナンと蘭の会話も聞いていたわけで…。
「平次、なんで蘭ちゃん、コナン君のこと“新一”って呼んでるん？」
「……。」
「平次？」
「やかましいわ。」
「へ・い・じ・何で？」
「……。」
「教えてくれたってええやん。」
あまりに和葉がしつこいので、ついに平次はブチ切れた。
「……やかましいんじゃぁ～～～！黙っとれっっ！！！！」
「なんやの？教えてって言っても教えてくれへんのに！！」
それから2人は、かれこれ5分ぐらい言い争っていた。
「……おいお前ら、いい加減にしろよ…。」
『えっ？』
2人が横を見ると、そこには不機嫌そうな顔をした、コナンが立っていた。先程のコナンの声は低く、あきらかに怒っている。
（ヤ…ヤバイ…）

「バ、バレとったんかい。」
「当たり前だろ…。あんな大声、気付かない奴がいるか！」平次と和葉は、何とかコナンの怒りを沈めようと考えていた。
「まぁ、そんなカリカリすんなや。」
「そうや、喫茶店でも行って落ち着きな？ここで立ち話もなんやし。」
「…そうだな。」
こうして一応コナンを落ち着かせ、平次と和葉とコナンは近くの喫茶店に向かった。

「じゃあお前らは、公園でのこと最初から見てたわけか…。」
和葉は申し訳なさそうな顔をしている。「ごめんなコナン君、別に見るつもりはなかったんやけど。」
「気にしなくていいよ。それより和葉ちゃん、見てたってことは俺のことも…」
「コナン君が、工藤君やったってことやろ？平次言ってくれへんかったから、自分で結論出したんや。」
「そうか…。」
それからしばらく沈黙が続いた。すると和葉が、沈黙を破るようにコナンに聞いた。
「そういや蘭ちゃん、あの後どこ行ったん？」「あぁ、蘭はどこ行ったか分からないんだ。事務所（蘭の家）にはいなかった。」
「じゃあ今から姉ちゃん探しにいくか？」
「そやね、ウチら暇やし。」
「ありがとう2人共…。じゃあ早速、蘭を探しに行こう！」
『オー！！』
こうして平次と和葉とコナンは、蘭を探し始めた。

FILE7　大阪からの訪問者（後書き）

ついに平次と和葉が登場！大阪弁が変かもしれないですけど、そこは軽く流してやって下さい。（オイ…）それと、優しいお方、本音でいいので是非評価を下さい！読者の方々がこの小説をどのように思っているのかとても気になるので、よろしくお願いします。

FILE8　蘭の気持ち

こうしてコナン達が蘭を探し始めた時、蘭は・・・・トロピカルランドにいた。

何故ここにきたのか・・・・。

蘭にもよく分からなかった。

だ・・体が勝手にここに来てしまった。

（そういえば・・・ここに来てからだっけ・・・新一がいなくなったの・・・）

蘭はトロピカルランドをぐるぐると歩き回りながら、そう思った。

それからも別にすることもなく、そこら辺を歩き回ってる間に、だんだん日が暮れてきた。

最初は、何があっても新一に会いたくないと思っていた蘭だが、日が暮れてくるうちに、だんだん新一の話しも聞かずに逃げて来てしまった事を悪く思い始めた。

（新一にも、何か事情があったんじゃ・・・・。そうじゃないのに新一がわざわざ小学生になるわけないじゃない・・・・。）

何でこんな事に気付かなかったんだろう、と小声で呟くと、蘭はその場から駆け出していった。

FILE8　蘭の気持ち（後書き）

やっと投稿できました。　最近ずっと忙しくて、やっと暇ができたので、投稿しました。　そういえば、今回からちょっと文章の書き方を変えてみたんですけど、どうですか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7989a/

最後に、言っておきたいこと。

2010年11月16日09時50分発行